

国立公衆衛生院長期課程への教育評価に
関する調査報告（その1）
— 専攻課程保健コース —

西田 茂樹

(国立公衆衛生院保健統計人口学部)

橋本 修二

(東京大学医学部 (前国立公衆衛生院保健統計人口学部))

森川 馨

(国立公衆衛生院衛生薬学部)

植田 悠紀子

(国立公衆衛生院公衆衛生看護学部)

佐藤 加代子

(国立公衆衛生院母子保健学部)

高野 陽

(国立公衆衛生院次長)

横山 栄二

(前国立公衆衛生院院長)

**The Evaluation of Education in the Course Leading to the Master
of Public Health and in the Course Leading to the Diploma
in Public Health of the Institute of Public Health
(1) Health Science Discipline in the Course Leading
to the Diploma in Public Health**

Shigeki NISHIDA

(Department of Demography and Health Statistics, The Institute of Public Health)

Shuji HASHIMOTO

*(Faculty of Medicine, Tokyo University (Former Department of Demography
and Health Statistics, The Institute of Public Health))*

Kaoru MORIKAWA

(Department of Pharmaceutical Hygiene, The Institute of Public Health)

Yukiko UEDA

(Department of Public Health Nursing, The Institute of Public Health)

Kayoko SATO

(Department of Maternal and Child Health, The Institute of Public Health)

Akira TAKANO

(Deputy Director General, The Institute of Public Health)

[キーワード] 国立公衆衛生院, 専攻課程保健コース, 教育, 評価

[平成7年6月27日受理]

Eiji YOKOYAMA
(Former Director General, The Institute of Public Health)

S. NISHIDA, S. HASHIMOTO, K. MORIKAWA, Y. UEDA, K. SATO, A. TAKANO, E. YOKOYAMA *The Evaluation of Education in the Course Leading to the Master of Public Health and in the Course Leading to the Diploma in Public Health of the Institute of Public Health (1) Health Science Discipline in the Course Leading to the Diploma in Public Health*, 44(3), 372-382, 1995.

We carried out a survey by using a questionnaire in order to evaluate fruits of our education in the course leading to the diploma in public health, health science discipline, at the Institute of Public Health. Subjects of the survey are alumni and alumnae during the recent five years. The duration of the survey was from December 1993 to March 1994. Results are as follows.

The response rate was 96.3%. Almost all graduates answered that their senses and attitude to public health had much improved by studying in the course at the Institute and that they put knowledge and technique learned in the course to practical use. Furthermore, they answered that the course was useful for building up people's good relationships with research professionals and their own and other field's occupational professionals of public health. From an administrative point of view, it was certainly inferred that education in the course leading to the diploma in public health, health science discipline, at the Institute of Public Health was rewarded with good results.

Key Words The Institute of Public Health, The Course Leading to the Diploma in Public Health (Health Science Discipline), Education, Evaluation

(Accepted for publication, June 27, 1995)

I. はじめに

わが国の公衆衛生の発展のためには、公衆衛生従事者の資質が維持、向上されることがきわめて重要である。公衆衛生上の問題は、社会・経済状況や人口構造等の変動の影響を受けて常に変化しており、また公衆衛生分野での知識や技術も常に進歩している。公衆衛生従事者には、このような公衆衛生上の問題の変化や知識、技術の進歩への対応が求められ、このため、公衆衛生従事者に対する現任教育、訓練はきわめて重要であると言える。また、わが国の文部省による教育制度には公衆衛生の専門家を育成する課程が無く、公衆衛生の現場で指導者と成り得るような人材育成は行われていない。これらの事情に鑑み、厚生省の附属試験研究機関として国立公衆衛生院が設置されており、公衆衛生従事者の教育訓練にあたっている。

国立公衆衛生院の教育訓練は、大きく分けて、1年間以上の期間にわたって教育を行う長期課程と1ヵ月前後の期間で教育を行う短期課程とに分けられている。この内、長期課程は、研究課程、専門課程、専攻

課程から構成されており、それぞれ、「公衆衛生の分野において、専門家として自立して研究課題を行うに必要な高度の研究能力及びその基礎となる豊かな学識を養い、公衆衛生の行政、教育、研究の指導者を育成する」、「広い視野に立って公衆衛生学に関する精深な知識、技術、技能を授け、公衆衛生の専門職等に必要な高度の能力を養う」、「公衆衛生関係業務に従事している技術者又は従事しようとする者に対し、公衆衛生の基礎と技術を授け、環境、看護又は保健の分野における幹部指導者に必要な学理と、その応用に関する能力を養う」の役割を担っている¹⁾。この内、専攻課程は、公衆衛生従事者の職種を考慮して、環境コース、看護コース、保健コースに分けられており、環境コースは「環境分野の幹部技術者」、看護コースは「公衆衛生看護の幹部技術者」、保健コースは「食物栄養系、体育・健康及び社会福祉の三領域における幹部技術者」の育成を目的としている。

現在の研究課程、専門課程、専攻課程から構成される教育体制は1980年から実施されており、既に14年間にわたって修業生を送り出している。この間、修業時

の調査等によって修業生の意見を聴取するとともに、これらに基づいて、各課程の運営やカリキュラムの改善を行ってきているが、各課程の教育を対象とした全面的な評価は実施していない。そこで、今回、国立公衆衛生院の長期課程の教育の評価を実施することとし、まず、ほとんどの学生が1年間で修業するとともに、教育の多くの部分が合同で行われている専門課程、専攻課程について教育評価を行った。本報告では、専攻課程保健コースに対する教育評価について述べる。

II. 方 法

過去5年間の国立公衆衛生院専攻課程保健コース修業者の内、住所が不明であった1人を除いた27人を対象とし、郵送法による調査を実施した。調査票は全課程に共通の質問項目及び各課程・各コースに独自の質問項目の両者で構成した。保健コースの場合には、大学新卒者が多いこと等の点を考慮して、独自の質問を

6項目作成した。調査票の配布は1993年12月に行い、1994年3月22日までに回収された調査票について分析を行なった。有効回収数は26で、回収率は96.3%であった。

III. 結 果

表1に、国立公衆衛生院を修業したことにより、公衆衛生に対する意識にどのような変化が生じたかについて回答を求めた結果を示す。「特に変化があったとは思わない」は皆無であり、全員が何らかの意識の変化があったと答えている。意識の変化の内容としては、「新聞やテレビ等で公衆衛生の関連情報がどのように取り上げられているかを注意してみるようになった」が約4分の3の者から、「チームの一員としての自分の役割を考えるようになった」が約半分の者から選ばれている。「公衆衛生の概念が明確になった」をはじめとする他の項目は20~35%の者から選ばれているにとど

表1 公衆衛生に対する意識の変化について

変化なし	0	(0%)
変化あり	26	(100%)
変化ありの内容		
「公衆衛生」の概念が明確になった	8	(30.8%)
公衆衛生活動を行政との関係で考えるようになった	9	(34.6%)
住民など活動の対象となる人々の考えや希望を重視するようになった	7	(26.9%)
広く全国的な視野で考えるようになった	6	(23.1%)
広く国際的な視野で考えるようになった	6	(23.1%)
長期の将来的視野で考えるようになった	7	(26.9%)
チームの一員としての自分の役割を考えるようになった	14	(53.8%)
マスコミで公衆衛生の関連情報がどのように取り上げられているかを注意してみるようになった	19	(73.1%)
その他	1	(3.8%)

表2 公衆衛生院で学んだ知識や技術の活用について

活用できたものはない	4	(15.4%)
活用している	26	(84.6%)
活用しているの内容		
職場で他の人々に伝達し、業務の改善につながった	6	(23.1%)
教育や研修・研究会などの学習の場で、業務の改善につながった	7	(26.9%)
日常の業務の中で実施している	12	(46.2%)
その他	3	(11.5%)

まっている。

国立公衆衛生院で学んだ知識や技術がどのように生かされているかについて回答を求めた結果(表2), 22人(84.6%)の者が「活用している」と答えていたが, 4人(15.4%)の者は「活用できたものはない」と答えていた。活用している内容としては, 約半数(46.2%)の者が「日常の業務の中で」と回答していた。

国立公衆衛生院を修業したことにより, 職位・処遇・業務内容等に変化があったかどうかについて聞いた結果(表3), 「特に変化はない」と答えた者は11人(42.3%)であり, 半数以上の者(57.7%)は何らかの形で職位・処遇・業務内容等の変化があったと答えている。変化の内容としては, 「昇格または昇級した(または国立公衆衛生院を修業したことで採用された)」が8人(30.8%)と最も多く, 次いで, 5人(19.2%)の者が「研究や学習の機会が他の人より多く与えられていると思う」と答えている。

以上の設問で回答を求めた内容のほかに国立公衆衛

生院で学んで良かったと思う点について聞いたところ(表4), 最も多かった回答は「必要な時に情報を交換したり, 指導を受けたりできる人脈ができた」の19人(73.1%)であり, 次いで「学習や研究の仕方が分かった(69.2%)」「新しい知識が得られた(61.5%)」であった。「今までの知識や技術の再学習ができた(53.8%)」も高い割合を示した。文献検索の方法がわかったと答えた者は約4分の1であった。

表5に, 保健コースの同期生との修業後の交流状況を示す。交流していない者は1人(3.8%)に過ぎず, 残り全員は何らかの交流を同期生と持っている。交流の内容としては, 「連絡を取り合い, 近況を尋ね合っている」や「時には集まって旧交を暖める」が多いが, 「仕事上の情報交換や相談をしている」者も11人(42.3%)おり, 半数近くの者が業務上での交流を行っている。

保健コース以外の環境コース, 看護コース及び専門課程の同期生との修業後の交流については(表6), 交

表3 公衆衛生院を修業したことが関係していると思われる職位・処遇・業務内容などの変化について

変化はない	11	(42.3%)
変化した	15	(57.7%)
変化したの内容		
昇格または昇級した (または, 公衆衛生院を修業したことで採用された)	8	(30.8%)
研究や学習の機会が他の人より 多く与えられていると思う	5	(19.2%)
より責任ある仕事を担当するようになった	0	(0%)
グループのリーダー的役割が多くなった	3	(11.5%)
教育的あるいは指導的業務が多くなった	2	(7.7%)
職場の人等に意見を求められることが多くなった	1	(3.8%)
その他	3	(11.5%)

表4 公衆衛生院で学んで良かった点について

新しい知識が得られた	16	(61.5%)
今までの知識や技術の再学習ができた	14	(53.8%)
学習や研究の仕方が分かった	18	(69.2%)
文献を検索して必要な情報を 集めることができるようになった	7	(26.9%)
必要な時に情報を交換したり, 指導を受けたりできる人脈ができた	19	(73.1%)
その他	3	(11.5%)

流していない者は8人（30.8%）であり、3分の2以上の者（18人，69.2%）は、他の課程・コースの同期生と交流を持っている。交流の内容としては、「連絡を取り合い、近況を尋ね合っている」と「時には集まって旧交を暖める」の割合が高いが、6人（23.1%）が「仕事上の情報交換や相談をしている」と答えている。

修業後の国立公衆衛生院職員との交流については（表7）、交流していない者はわずか2人（7.7%）に過

ぎず、ほとんどの者は何らかの交流を国立公衆衛生院職員と持っている。交流の内容としては「電話や郵便でときどき近況を報告する」と「職場や住所の変更を必ず連絡するようにしている」が多いが、「仕事上必要な情報を問い合わせる」と答えた者が12人（46.2%）、「人を紹介する、人に紹介する」と答えた者が6人（23.1%）、「研究の指導を受ける」及び「研究の助言を受ける」と答えた者が5人（19.2%）おり、相当数の

表5 修業後の保健コースの同期生との交流について

交流していない	1	(3.8%)
交流している	25	(96.2%)
交流しているの内容		
連絡を取り合い、近況を尋ね合っている	17	(65.4%)
時には集まって旧交を暖める	16	(61.5%)
仕事上の情報交換や相談をしている	11	(42.3%)
一緒に研究的な取り組みをしている	0	(0%)
その他	1	(3.8%)

表6 修業後の他のコース（環境コース・看護コース）・課程（専門課程）の同期生との交流について

交流していない	8	(30.8%)
交流している	18	(69.2%)
交流しているの内容		
連絡を取り合い、近況を尋ね合っている	12	(46.2%)
時には集まって旧交を暖める	6	(23.1%)
仕事上の情報交換や相談をしている	6	(23.1%)
一緒に研究的な取り組みをしている	0	(0%)
その他	1	(3.8%)

表7 修業後の公衆衛生院の職員との交流について

交流していない	2	(7.7%)
交流している	24	(92.3%)
交流しているの内容		
職場や住所の変更を必ず連絡するようにしている	12	(46.2%)
電話や郵便でときどき近況を報告する	18	(69.2%)
仕事上必要な情報を問い合わせる	12	(46.2%)
研究上の助言を受ける	5	(19.2%)
研究の指導を受ける	5	(19.2%)
共同研究をする	0	(0%)
自分の所属する自治体や職場での研修の講師を依頼する	0	(0%)
人を紹介する、または人に紹介する	6	(23.1%)
その他	0	(0%)

修業者が仕事に関連した交流を国立公衆衛生院職員と持っている。

表8に「国立公衆衛生院の専攻課程保健コースに入学、修業せず、大学卒業後、直ちに現在の勤務先に就

職していた場合に、仕事に取り組む姿勢や意識は現在とは異なっていたか」について回答を求めた結果を示す。大半の者(20人, 76.9%)は「現在とは異なっていた」と答えており、国立公衆衛生院における教育に

表8 専攻課程保健コースを修業せずに就職していた場合の仕事に取り組む姿勢や意識について

現在と同じまたは変わらない	5	(19.2%)
現在とは異なっていた	20	(76.9%)
無回答	0	(0%)
不明	1	(3.8%)

表9 異なっていたとした具体的な回答例

1. 入学しなければ人脈がこんなに広がらず、研究向上しようという気持ちはわかかなかったと思う。入学して少しは視野が広がった。心理学科卒業だけではソーシャルワーカーができなかったと思う。
2. 栄養指導の面では差はないと思われるが、企画力については意欲や姿勢がまったく異なっていたと思う。一人職種だけに「チーム(保健所)の中の一員である」という自覚を持っていなかったように思う。
3. 仕事に対してより積極的になった。
4. 合同臨地訓練での勉強が大いに役だっていると思います。共同作業でのプロセスの大きさがわからなかったような気がします。
5. 仕事に対する姿勢が積極的になったと思う。
6. 地域での具体的な公衆衛生活動を知ることができ、栄養士の役割も具体的に知ることができたため、仕事についても積極的に行動することができた。
9. 姿勢は前向きに、意識は専門的に。
10. 何の問題意識も持たずに、ただ毎日の業務に追われてしまうと思う。
11. 自分の持つ資格免許の専門性や位置づけについて考えるようになった。
12. 公衆衛生の関連情報に興味を持ち、幾分理解できるようになった。
13. 看護職と他領域の職種の人々との関心の持ち方の相違やあるいは看護職以外の人々が看護に対してどのように考えたり感じたりしているかを意識するようになった。更にこの仕事が自分自身の看護に対する考えを広げ多角的にとらえられるようになったのではないかと考えている。
14. 大学を卒業してすぐに教育、研究の分野に入ることはとても難しいと思うが、公衆衛生院での1年間は大学の4年間にも増してとても充実したものであったので大学へ就職してからの自信につながったと思う。また、自分自身で考えて計画してそれをこなしていくという姿勢もこの1年でかなり身につけたと思う。
15. チームで行う仕事の重要性がわからなかっただろうと思う。
16. 与えられた仕事をただ事務的にこなすのではなく一度自分の頭で整理して納得してから行うようになった。
17. 広い視野で物事をとらえることができなかったと思う。他の職種との交流が十分できなかったと思う。
18. もし公衆衛生院にこなかったら公衆衛生学会に参加することもなく、調査研究等の論文にも興味を示すこともなかった。大学の4年間よりもはるかに充実した1年間で、教育を受けたという満足感は今も変わりません。
19. 専門知識や自分の専門性に対する責任感の違い。公衆衛生院で修業していなければ、視点の狭いところで栄養士の仕事を考えていたと思う。今は他の職種との違いも考えて(ケースにあわせて)チームで仕事ができるようになったと思う。
20. 学習や研究の進め方等が、特に合同臨地訓練により学ぶことができたため、仕事を進める上での自信につながっていると思う。
21. 物の見方、視野(公衆衛生の)が広がった。系統立てて考えられるようになった。
22. ①地域・他機関(例、病院・福祉事務所、保健所)との連携。②単にアルコールをやめるだけではなく栄養指導や調理指導を通して、身体的健康の回復や買い物の仕方、買い物を通して社会生活に深く関わって行く。食行動を通して自分を大切にしていって意識の向上など図れたのではないかと。また栄養士は公衆衛生院での同期生に依頼。③特別演習を通して、自分を見つめる作業を経験し、自分の行動とその背景にある自分の考え方や行動パターンについて冷静に見つめるように務めた。④新卒で就職していたら福祉からしか対象者を見られなかったかもしれないが、栄養士、医師、保健婦等と関わったことで身体面の健康も重視するようになった。
23. チームワークを大切にするようになった。

より、仕事に取り組む姿勢や意識が向上したとしているが、5人(19.2%)の者が「現在と同じまたは変わらない」と答えていた。現在とは異なっていた内容について具体的に回答を求めた結果を表9に示す。

表10に「国立公衆衛生院の専攻課程保健コースに入学、修業せず、大学卒業後、直ちに現在の勤務先に就職していたと考えた場合と比較して、国立公衆衛生院を修業したことで実際の仕事上で役立っていること」について回答を求めた結果を示す。「修業したことで役立っていることはある」と回答した者は21人(80.8%)であったが、3人(11.5%)の者が「修業したことで役立っていることはない」と回答していた。役立って

いる内容について、具体的に回答を求めた結果を表11に示す。

「以上の質問項目以外に、国立公衆衛生院の専攻課程保健コースに入学、修業せず、大学卒業後、直ちに現在の勤務先に就職していたと考えた場合と比較して、国立公衆衛生院を修業したことで生じたメリット」について聞いたところ、「修業したメリットはなかった」と回答した者は3人(11.5%)、「修業したメリットはあった」と回答した者は19人(73.1%)であった(表12)。メリットの内容について、具体的に回答を求めた結果を表13に示す。

「国立公衆衛生院の専攻課程保健コースの特別演習

表10 専攻課程保健コースを修業せずに就職していた場合と比較して公衆衛生院を修業したことで実際の仕事上で役立っていることについて

修業したことで役立っていることはない	3	(11.5%)
修業したことで役立っていることはある	21	(80.8%)
無回答	1	(3.8%)
不明	1	(3.8%)

表11 役立っているとした具体的な回答例

1. 研究の仕方がわかった。物の考え方が広がっていると思う。
2. 合同臨地訓練で他分野の方々との交流、話し合い等があったため、仕事で担当しているさまざまな委員会、学生指導に役立っていると思う。
3. アンケート調査を3回実施しましたが、その際の調査、まとめて役立ちました。コンピューターを習得できた。これは今多めに役だっています。
4. 公衆衛生院時代に様々な職種の方々話し合う場が得られたので、仕事を進める上で、さまざまな考えを受け入れ、処理できていると思う。また、人脈ができたので情報をチェックしやすい。
5. 資料の見方。
6. 基本的な研究のまとめ方が分かった。
7. 臨床の看護婦から教員になることができた。教員としての資格の1つとして評価されている。
8. ワープロ操作。キャリアや専門の異なるの方々との交流(情報を得たり相談できる人脈)。公衆衛生(特に公衆栄養分野)の視点に立った考え方。
9. 医師や保健婦と、会社の定期検診結果の統計について話をするとき、内容にそれなりについていける。データの見方等、今思えば、公衆衛生院で身についた。
10. 卒業研究の指導がなんとかできる。ここぞという時にねばりがきく。
11. 病院に現在、勤務しているものですから、これといって挙げられるものはないのですが、全体的に物事を考えたり、行うに際して、広い視野で見れているのではないかと思います。
12. 調査研究(業務の一部です)。
13. 多角的に見られるようになったこと。考えることができるようになったこと。
14. 公衆衛生院での先生とのつながりで、仕事上アドバイスをいただける。
15. チームワーク、コンピューターに対する知識、研究に対する方法を自分なりに理解できたので、役立っている。
16. 公衆衛生全般に関する知識の大きさにより企画、立案していく上に大いに役立っている(広い視野で考えられるように思う)。コンピューターの技術を身につけているため、大いに活用でき、また業務の迅速化へもつながっている。
17. ソーシャルワーカーの知識が身についた。人脈が広がった。
18. パソコンを使って仕事をやるようになった。仕事のまとめをして学会に発表するようになった。
19. 以前より興味や知識の幅が広がったこと。対人の仕事なので対象を意識してできるようになったこと。

で学んだことが、現在の仕事に、知識や技術等の面で役立っているか]について聞いたところ、「役立っていない」と回答した者は4人(15.4%),「役立っている」と回答した者は20人(76.9%)であった(表14)。役立っている内容について、具体的に回答を求めた結果を表15に示す。

最後に、表16に修業生の就業状況を示す。病院へ就職した者が最も多く、8人(30.8%)を占めており、次いで、大学等の教員が6人(23.1%),保健所等の地方公共団体が5人(19.2%)となっている。

表12 専攻課程保健コースを修業せずに就職していた場合と比較して公衆衛生院を修業したことで得たメリットについて

修業したメリットはない	3	(11.5%)
修業したメリットはある	19	(73.1%)
無回答	3	(11.5%)
不明	1	(3.8%)

表13 メリットとして挙げられた具体的な回答例

1. 人脈。
2. 給与の等級が1つ上がった。機関連携に対して、中心的役割を期待された。
3. 論文を読んだり、探したりしていく上での基本的な情報、知識が持てたこと。学歴として加算されている。
4. 保健所勤務の経験はありませんが、公衆衛生院の出身であるということは、それだけで顔を覚えて頂けたり、公衆衛生院出身の先輩にかわいがってもらえます(公私とも)。
5. 大学卒業後すぐに公衆衛生院に入学した。大学在学中は物事を十分に考える余裕が無く、自分の考えや将来について確かな考えを持つことができなかった。しかし、修学中は自分の考え無しでは他の人々と語り合うこともできず、様々な人々との出会いを通して仕事のみでなく、良き友達ができた。
6. 保健所勤務になればメリットはあるかもしれないが?
7. 仕事をしていく上でチームの一員として自分の専門性を活用して行うことの重要性や研究のまとめ方、そしてもっと良かったのは、分からない事など相談できる先生方にもめぐり合う事ができたという事だと思う。
8. 人脈ができた。
9. 実際の研究を行うにあたって、初歩的な手法や考えの進め方ができたと思っている。
10. 論文を書く機会を持ち細かな指導を受けることができた。地方にない施設の見学、異職業の方との共同研究、学会への参加、著名な専門家のお話をうかがうなど、新たな経験を得た。
11. 産業界や会社の保健婦にそれなりの目で見てもらえる。これが教育大保健学科では相手にされにくかったと思う。逆に、自分も保健婦、栄養士等に公衆衛生院で接していたためにスムーズに溶けこめた。上司や周囲の人を見ると専門職アレルギーの人が多い。
12. 同じ課程(または同じコース)の同期生、違う課程の方との交流により情報収集及び次の時勢をただす事ができる。
13. 数少ない栄養士の知り合いがたくさんでき人脈がひろがった。そのため専門的な情報を得る事ができる。
14. 衛生院の研究(老人を対象にした寒冷環境の実験)がなければ現在の会社に入らなかったと思います。
15. 著名な先生方を知るきっかけになりましたが、これをメリットといえばメリットですね。
16. 大学院扱いの給料がもたらした。ハクがついた。より良い就職先につけたと思う
17. 仕事上、関係ある人たちと知り合いになれたこと。

表14 専攻課程保健コースにおける特別演習で学んだことで現在の仕事に役立っていることについて

役立っていない	4	(15.4%)
役立っている	20	(76.9%)
無回答	1	(3.8%)
不明	1	(3.8%)

表15 役立っているとした具体的な回答例

1. パソコンの使用など。
2. 研究の方法、コンピューター操作などは現在の仕事にストレートに役立っています。
3. 方法、考え、コンピューター。
4. ワープロも打てない状態だったので事務的に役立った。また、対象者にワープロ指導ができた。
5. コンピューター操作（ワープロでない部分）が少しはできるようになったこと。まとまった（手段、進め方がわかった）、自分の研究したテーマに関しては、詳しくなった事。
6. コンピューターの操作は役立っています。
7. 現場にいと、どうしてもその場限りの仕事としてしまう事が多いが、必ず評価していく、それをフィードバックすることが習慣づいてきたようだ。
8. 今のところはまだ。ただ今後は役立てようと思う。
9. 研究の方法やコンピューター操作方法。いずれにしても知識を持つ事のみにとどまらず、現在は特にそれを活かす事のできる場にいるので、演習で学んだ事を思い出しながら足りなかったところは補いながら研究を続けている。
10. 色々なコンピューターのソフトの使い方を覚えた。調査等で実施する際、それ以前とは異なった角度からもの考えるようになったかもしれない。
11. パソコンの導入をしてもらったと思っている。現在の研究で統計的解析を実施するのに役立っている。
12. パソコン操作、調査研究の考えの進め方（調査の交渉の仕方、文献検索の方法、研究のまとめ方等）。
13. 報告書の作成するときに、話（文章）の持っていき方、表現の仕方など、特別演習の論文の書き方がとても参考になる。
14. 研究内容、方法、全ての事が役立っている。何よりも研究の進め方を学べた事が今とても役立っている。
15. コンピューターではないのですが、パソコンを使用して業務の能率化を行っている。
16. 調査、研究方法を少しであるが知っている（ほとんどの栄養士は知らない）。コンピューターに関しても積極的に操作する事ができる（コンピューター慣れができたということでしょうか）。
17. 栄養士として考える事を意識するようになった。
18. 仕事をする上でのチームワーク。
19. 方法論が研究発表に役立ち、コンピューター操作が業務の基盤となった。
20. 研究業務に現在取り組んでおりますが、解析、その他、大いに役立っている。また、他の職員への技術指導も引き受けることがある。文章の作成はワープロ及びコンピューターによるソフトどちらも使いこなす事ができる。

表16 修業生の就業状況

保健所等の地方公共団体	5	(19.2%)
病院等	8	(30.8%)
<内 国立病院	3	(11.5%)>
大学等教員	6	(23.1%)
<内 大学教員	4	(15.4%)>
民間研究所等	4	(15.4%)
財団法人	1	(3.8%)
その他	2	(7.7%)

IV. 考 察

1. 修業生の就職先について

専攻課程保健コースの特徴の一つは、大学新卒の無職の学生がほとんどである点である。したがって、修業後の修業生の就業状況は、国立公衆衛生院の教育に対する社会あるいは自治体等からの評価であるとも考えられる。表16に示されたように、修業生の多くは、保健所を代表とする自治体の公衆衛生機関、国立病院、

大学の公衆衛生関係教室等に勤務している。また、後述するように、就職の際に国立公衆衛生院を修業していることで採用されたと思われる者も数多く存在している。このことは、国立公衆衛生院の教育が社会あるいは自治体等から一定の評価を得ていることを意味しているのではないと思われる。また同時に、専攻課程保健コース修業生が、公衆衛生諸機関、国立病院、大学等へ勤務していることは、国立公衆衛生院が社会に対して相応の役割を果たしていることを意味してい

るのではないかと考えられる。

2. 調査結果について

表1～15に示された結果を見る限り、修業生の回答は、国立公衆衛生院の長期課程の教育の成果を高く評価するものと言える。実質的に有記名回答となったため、批判的な回答は書き難かったと思われるが、自由記入の回答(表9, 11, 13, 15)においても高い評価を得ており、修業生の国立公衆衛生院専攻課程保健コースにおける教育への評価は高いと判断しても差し支えないと思われる。

回答の内容を再度検討すると、まず、「国立公衆衛生院の長期課程の教育を受けたことで公衆衛生に対する意識が変化した」と答えた者は全員であった。国立公衆衛生院の専攻課程保健コースの教育により公衆衛生に対する意識が向上した、との評価を得ていると考えられる。

「国立公衆衛生院で学んだ知識や技術を活用している」と答えた者は約85%を占めており、活用している具体的な場面としては、半数近くが「日常の業務の中で」と答えていた。専攻課程保健コースの教育は、公衆衛生の現場において活用できる知識や技術も伝えていられると考えられる。

「国立公衆衛生院を修業したことにより、職位・処遇・業務内容などが変化した」と答えた者は、約85%を占めており、特に30%の者が「昇格または昇級した(または、国立公衆衛生院を修業したことで採用された)」と答えていた。専攻課程保健コースの場合には無職学生がほとんどであるため、「昇格または昇級」は考え難く、「国立公衆衛生院を修業したことで採用された」であったと考えられる。前述したように、一部の自治体や関係諸機関が国立公衆衛生院の教育を評価して、職員採用等の点で考慮しているのではないかとと思われる。

国立公衆衛生院で学んで良かったと考える点については「必要な時に情報を交換したり、指導を受けたりできる人脈ができた」「学習や研究の仕方がわかった」「新しい知識が得られた」と答えた者が多く、専門家や他の公衆衛生従事者との人脈が形成されたこと、及び最新の知識に触れることが出来たことを高く評価している。国立公衆衛生院の役割の一つが果たされたものと思われる。また、この点と関連して、「同一課程、同

一コースの同期生との修業後の交流」及び「異なった課程、もしくは異なったコースの同期生との修業後の交流」があると答えた者も多く、さらに「仕事上の情報交換や相談」を行っており、同一職種間、異職種間の人脈形成に国立公衆衛生院の長期課程は役立っていると考えられる。さらに「国立公衆衛生院の職員との修業後の交流」をしている者も90%を越えており、その内容は「近況報告」が最も多いものの「仕事上必要な情報を問い合わせる」と答えた者が約45%に及んでおり、国立公衆衛生院は修業生に対する情報提供機関として機能していると考えられる。

以上に述べたように、修業生からの評価は概ね良好と言えるが、公衆衛生に対する意識の変化の質問に対して、「公衆衛生の概念が明確になった」「公衆衛生活動を行政との関係で考えるようになった」をはじめとして、国立公衆衛生院専攻課程の教育によって本来修得することを求められる内容を選択して回答した割合が低かった点(表1, 2, 4)及び「公衆衛生院で学んだ知識や技術で活用できたものはない」と答えた者がいた点(表2)等に問題が残ると考えられる。今後の教育において十分に考慮し検討すべき課題と思われる。

保健コース独自の質問項目は、「専攻課程保健コースを修業せずに就職した場合」と比較して、「仕事に取り組む姿勢や意識」「実際の仕事上で役立っていること」「修業したことで生じたメリット」を問うたものであり、全課程、全コース共通の質問項目と類似している。従って、大半の者からは良好な回答を得たが、「姿勢や意識に変化なし」「仕事上で役立っていることはない」「メリットはない」と回答した者も若干名認められた。否定的な回答の原因は、仕事が公衆衛生分野でなく、病院での臨床栄養指導であったり、民間企業であったりするためではないかと思われるが、さらに詳細に検討する必要があると思われる。また、その結果に応じた教育内容の再検討も考慮する必要があると思われる。

保健コース独自の質問項目に対する自由回答の中では、「チームワークを重視するようになった」「公衆衛生に対する視野が広がった」「他領域の職種の人々の関心の持ち方、考え方を知った」「自分自身の職種の専門性や位置づけを意識するようになった」「知識量の増

大」等の記述が多かった。専攻課程で得た知識、技術で役立っているものとしては、「コンピューターの操作方法」「企画、立案方法」「研究方法」「報告書の作成」等の回答が目立っていた。これらの回答の中で、「チームワーク」「他職種の関心、考え方」「自職種の専門性や位置づけ」「企画、立案方法」「報告書作成」、さらに共通質問項目にあった「人脈形成」等は、講義等による単なる知識伝達型の教育方法では修得困難なものである。これらの知識、技術は、国立公衆衛生院の長期課程の教育において重視されている合同臨地訓練と特別演習で修得されていると推測される。「コンピューターの操作方法」も講義と実習は行われているものの、実際にコンピューターを頻繁に使用し、操作を理解するのは合同臨地訓練と特別演習であり、合同臨地訓練と特別演習によってコンピューターの操作方法が修得されていると考えられる。合同臨地訓練は、異なった職種の学生がチームを作り、保健所等のフィールドで地域での問題発掘や問題解決を目的とした調査等を行い、その報告書をまとめる演習である。特別演習は個人で同様の調査等を実施し、論文にまとめる作業である。これらの訓練、演習が、良好な教育結果をもたらしているものと考えられる。

V. 結 語

国立公衆衛生院専攻課程保健コースの過去5年間の修業生に対して、国立公衆衛生院長期課程の教育の成果に関する調査を実施した。その結果、専攻課程保健コースにおける教育により、公衆衛生に対する意識が向上したとの回答を得るとともに、国立公衆衛生院で得た知識・技術が日常業務において活用されているとの答えも得た。また、長期課程が公衆衛生従事者間の人脈作りに寄与していることも明らかになった。これらの調査結果から、国立公衆衛生院専攻課程保健コースの教育は、修業生から概ね高い評価を得ていると判断されるとともに、成果を上げていると思われた。

本研究実施にあたり、種々の面でご協力頂いた国立公衆衛生院総務部教務課の皆様には感謝致します。

本研究の一部は、平成5年度厚生科学研究「公衆衛生従事者の卒後教育の成果に関する研究（主任研究者：染谷四郎、分担研究者：横山栄二・野崎貞彦・曾田研二）」として実施した。

文 献

- 1) 国立公衆衛生院。平成7年度入学案内。1994